
Endless Dystopia Online

ナノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Endless Dystopia Online

【Nコード】

N1332BA

【作者名】

ナノ

【あらすじ】

VRMMO『Endless Dystopia Online』。軍事技術を応用して造られたVRゲーム、その最新のMMO作である。特にそんなことなどどうでもよく過ごしていた俺は、大好きなマイシスターからのお誘いを受けてそのオープンテストに参加することとなった。何故か親友の青葉も共に。……キャラ設定で思いつきりデータをバグらせてしまったが大丈夫だろうか。しかもこのゲームはログアウト不可のデスクゲームで、俺達はゲームから出られなくなってしまうた。そうして始まったデスクゲームの中で、

俺は妹を助けるために昏睡状態に陥って
。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【?】 (前書き)

VRMMOモノですが六話までは現実編です。

因みに主人公が胸焼けしそうなぐらいのシスコン具合です。ノリでやっちゃいました。

駄文ですが、どうぞお楽しみください。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【？】

仮想体感^{VR}多人数同時参加型オンラインゲームというものは聞いたことがあるだろうか。

現実と変わらず五感を殆どそのまま共有し、仮想の世界で仮想のアバターを動かして世界中のプレイヤー達と協力、対決、共存する新感覚の体感型ゲームの一種である。

^{ヴァーチャルリアリティ}VRは元々アメリカが軍事目的に開発したある技術を応用して生み出され、初期は何の変哲もないコミュニケーション系のゲームとして登場していた。続いてオフラインのVR RPGやFPS等が発売され、今回ついにVR技術がMMOとして開発されたのである。

……まあ、全部今さつき知ったばかりの付け焼き刃の知識だけど。

俺はそこまで沢山のゲームはやっていない。義妹に誘われて一度MMOをやったことはあるが、自分でやることはあまりなかった。蛇足だけど、そのMMOでも変な通り名付けられて凹^{へこ}んだ。

そんな俺が何故こんなにも熱くゲームについて話をしているかと言つと……話は30分程前に遡^{さかのぼ}る……。

俺の名前は佐々木零都^{ササキレイト}。人は俺のことをこう呼ぶ、『厄介事』と……。

『厄介事の種』ではない、『厄介事』である。なにこの扱い……

泣ける。

神に恨まれてるとしか思えない。俺はこんなにも普通だということに。

まあ俺のことはどうでもいいや。もう諦めてるし。

次は…… My マイシスター sisterことマイエンジェル、俺の義妹、佐々木鈴音だ！サキススネ 愛称はスズ。世間的に一言で表すのなら…… 『自立したヒッキー』って感じだな。

……とりあえず、今笑った奴と馬鹿にした奴は地獄に落ちろ。スズをけな貶す輩は全員潰す。

え？ シスコンだつて？ そんなに褒めないでくれよアハハハハハハハハ

……コホン。さて、気を取り直して……。まあマイシスターはさつき言った通り所謂引き籠もり、ヒッキーというものだ。だがそれだけではない。ネット上のあらゆる情報をどこからともなく手に入れ、自宅に居ながらもPCを用いて毎度色々やって稼いでいるらしいのだ。なにしてるか知らないけど。

……まあ、家から全然出ないから食料は俺が確保して上げてるんだけどね。一応バイトもしてるし。

と、まあ……そんな可愛い可愛い我が義妹がある休日の昼食時、俺にこんなことを言ってきたのだ。

無口なスズが自分からしゃべるのは珍しいので俺は嬉々として耳を貸したわけだが、

「当たった」と、一言。

うん、いつも通り可愛いな。

……まあ言葉が足りないのはいつものことだ。気にするな。

「……ふむ」

当たった……ね。なんだろ、宝くじ？

因みにここで「なにが」とか聞き返してはいけない。禁句だ。

確かスズは最近VRゲームの方に興味を持ち始めていたよな。うん、仮想でも運動してくれるのは兄として嬉しい限りだ。

で、そんなスズのいきなりの「当たった」という一言。……VRか……確か青葉の野郎が『VRゲームがついにMMOに出た!』とか言ってたから……んー……。

「VRMMOのテストにでも当選したか？」

「そう」

よし、パーフェクト。俺がスズの言いたいことを解読出来ないことがあるものか！

どうやら話を聞く限りでは、あるMMOの大会で三位以内に入賞した特典によりチケットを貰えたらしい。このMMOもVRMMOを開発した会社のゲームだったんだろうな。

「ペアチケット」

「んー？ 二人分ってことか？」

「うん」

……そうか。二人分か……そうかそうか。

「一人じゃ、行けない」

「つまり俺に、一緒に行けと？」

「（こくっ）」

頷いた。可愛いな……ってそうじゃなくて。

とりあえず今の光景を脳内フォルダ7746番に削除不能にして

保存した後、俺は事の重大さをよく考えてみる。

テスターになる。

そのために出掛ける。

スズを外に連れ出せる……!?

つまり……スズは自分からそんなことに誘ってくれたということか!?

最高じゃないか！ 行こう！ すぐ行こう！ 早く行こう!!

「いつだっ!？」

「兄さんの、夏休み初日から」

タイミングも最高だ！ ありがとう神様！ さっき俺を恨んでるだなんて疑ってゴメン！ スズの次に愛してる！

……というようなことが30分前にあった。

というわけで今現在。俺は一人部屋でVRMMOについての情報を片っ端から集めまくっているのである。全てはスズの笑顔のために!

……少しテンション上げすぎたか。……え、自重？ するわけないじゃんww

さて、そうして情報を手に入れるために頑張ってるわけだが……
うん、何かかなり凄いつばい。

今回参加するVRMMOオープン テストのゲームタイトル『E
ndies Dystopia Online』らしい。
エンドレス デイストピア オンライン

このゲームのモンスターの一部には一般人のアイデア等も取り入
れてあり、様々な種類の相手がいるとか。

確か、常に進化し続けるためのシステムの人格化……その他、一
部のNPCやモンスターに人工知能、つまりは『AI』を搭載した
とか。

システム管理用『AI』には様々な権限もあり、システムの隅々
をしつかり管理しているとか。

『創造システム』によりプレイヤーはどんな武器や防具等でも創
り出すことが出来、『AI』の管理により新しい武器達の熟練度や
スキルも追加するシステムがあるとか。

スキルは『AI』からいくつも生み出され、個人に発現する特殊
な能力や、規定のクエストからしか入手出来ない特殊スキルがある
とかないとか。

……うん。とにかく凄いと、ということさえ覚えておけばいいだろ
う。

チケットにペアチケットがある理由は、恐らく知り合いが居た方
が気楽だろうと運営が考えた配慮だろう。粹なことしてくれるじゃ
ないか。Goodだよ！

まあ、スズに俺以外の知り合いはいないし、一人じゃ外で動けな
いだろうからな。……うん、本当に感謝してるよ。

さて……夏休みっていつからだっただかな。……ん？ 二週間後？
なんて微妙な……。

……とりあえず、俺はスズとの テストのために色々と下調べを
しておかないとな。どこでやるのか、とか……どうやって行くのか、
とかな。

あと、スズに変な虫が付かないように気をつけないと。まあ、手

を出して来る奴が居た場合……問答無用で殺っちゃうけど。

そんなこんなで二週間。いや、あつと言う間だったなあ。

なんか青葉の奴も高校で『テスト俺も当たった』とか言ってたけど、知るかそんなこと。俺は正直スズのこと以外は基本どうでもいいと思ってるからな。

さて、そして現在の時間は午前8時45分。バスでテストを行うホールに行くため、9時少し前に家を出発する必要がある。期間は一ヶ月。ふむ、意外と長いけど、スズのためなら幾らでも夏休みを潰してやるさあ！ 勿論、高校に通う日もな！

出発準備は勿論二人共終わっている。俺がスズを待たせるわけがないだろう。それにスズもこの日を楽しみにしてたんだから。

………ただ、問題が一つあるんだよなあ………。

「……なあスズ。その格好で行くつもりなのか？」

「……これしかない」

はあ、まあ、そうだけどさ……。スズは外に出ないから外出用の服は持ってないし、持ってると言えばスズが今着てる俺が以前上げた服しか無いけど……。これ、今のスズには小さいしな。他の野郎共の目に留まるような姿なのはいただけくない。

「……しかたないな」

そう呟いて部屋に戻り、服を入れてあるタンスからなるべく大きな半袖の上着を一枚取り出して、スズの待つ玄関へと戻る。

「とりあえずこれ着とけ。気休めくらいにはなるだろ」

俺とスズでは身長が大きく違う。少なくとも20cmは。

まあつまり、この上着を着ておけば体の2/3程を楽に隠せるわけだ。まあ黒の男物だけど、そこはしかたがない。第一、スズは最低限しか服装を気にすることはないからな。俺としてはもっとオシヤレをして欲しいものだが。

「……………うん」

と、スズは小さくそう返事をして俺が差し出した黒い上着を受け取った。その仕草を脳内削除不能フォルダ7746番に保存している間も、スズはそれに袖を通していく。元々着ていた藍色の服とスカートが黒の上着で殆ど隠されて少し残念に思ったが、顔には出さない。

「んじゃ、行くか」

「(こくっ)」

俺とスズ、二人分の荷物を持って俺は玄関の扉を開け外に出る。

続いて出てきたスズは最近暑さの増してきた日差しの眩しさを受けてしまい、目を細めた。

このクソ太陽が！！なにやってくれたんだ殺すぞ！…………

じゃなくて、事前に買っておいた日傘を傘立てから取り出してスズの方へ向き直る。

…………日差しがスズの姿をよく照らし、その儚さをより強く浮きただせている。病弱と言っても過言ではない、というより病弱なほほ

真っ白な肌。色の全く落ちていない真っ黒なストレートの長髪。若干痩せ気味で150cm程しかない16歳にしては小さな体（胸は言うまでもないだろうけど、Aだ。何故知ってるか？ 逆に言うが、スズについて知らないことなど俺には殆ど無いZE?）。極みに全く幼さの抜けていない童顔と大きな瞳。

……そんな、学校の奴等とは違う少し異常な姿に苦笑……なぞするわけもなく、微笑みながらこの時のために買っておいいた日傘をスズに受け渡す。因みに傘が重いと言われた場合は俺が持つて上げるつもり。又は予備として用意している帽子を渡す。終いにはおぶつても良い。

過保護？ シスコン？ ハッ、黙れクズ共。スズに仇なす者共は一人残らず俺が消し尽くす！ たとえそれが作者×読者だとしてもなあ！！

「ありがと、にいに……」

ほら、見る！ この可愛さ！ この愛らしさ！ この素直さ！ この無邪気さ！ そこの愚か者共なんて比べ者にならない程に最高の美しさだろう！

俺はスズのためなら何でもやってみせる！ たとえ空を飛べなante言われたとしてもなあ！

I Love my sister!! マイシスタースズは俺の天使なのだ!!

……さて、それはそうとしてそろそろ家を出ないとね。

「行ってきます……っと、スズ」

「……行ってきます……?」

うん、最高。

0 - 1 : 現実と仮想へのプロローグ【?】 (後書き)

現実編は一話3500〜4000文字程度。他編はわかりません。
変えるかもしれないし、そのままかも。

【??? / ????

HN : ??? LV???

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ????

Class : ????

Avilility : ????

Skill : ????

Equipment : ????

Money : ????

【G】

0 - 2 : 現実と仮想へのプロローグ【?】

そんなこんなでやって来ましたが、近所のバス停。とりあえず近くにいた青年Aを完璧無視しつつ、スズと共に近くのベンチに座る。

そしてそのままバスが来るのを待とうとしていると青年Aがスズの隣に座ろうとしてやがったので、思い切り蹴りつけて背後の壁に頭から埋め込ませてやる。後悔しながら死ぬがいい！

「ひ……酷いな……零都」

「あ”あ”ん？ 黙れクス。てめえに名乗る名なんざ無^ねえんだよ。消え失せる青年Aが」

「いや、俺は青葉鷹人^{アオバタカヒト}だつて！ ついこの前会ったばかりだろお前……」

「知らねえよ！ スズに手え出す野郎共は全員皆殺したクス男！ 覚えとけ！！」

「……すさまじきシスコン魂だな相変わらず」

とか言いながら青年Aがフラフラになりながらも立ち上がる。ちっ、しとめ損ねてたかっ！

「黙れよ、そんなに褒めんな。というわけで後五発くらいくらつとけ」

「おまつ！？ ちよっ！？ 待て待て！！ わかった！ 謝るから！ この通り！」

この通り、という言葉と共に目の前のクス男こと青年Aがフライング土下座などという超高難度技を繰り出してきた。はて、この技をこちら辺りで使えるのって確か俺の知る限りでは一人しかいなかった気が……って。

「……なにやってんだ、青葉」

「おま………もういいや、諦めよう」

そう言つと青年A改め青葉鷹人は立ち上がり、俺の隣に座つてくる。フツ、良い判断だ。スズの隣に座りやがってたらスクラップにしてやってたな。

「んで、それ……その子がお前の溺愛してるって言う義妹さんか？」

この野郎、スズを一瞬だが物扱いしやがって……まあいい。次は無いがな。

「そうそう。お前ら野郎共が幾ら集まったところで届きはしない程の可愛さを誇るマイ天使だ」
エンジン

「……そんなことない」

顔を赤くしつつ俺だけに聞こえるように小さくそんなことを言い放つスズの姿を脳内に刻み込みつつ、話を続ける。

「まあ、適当な自己紹介をしてやると……この失礼なクズ野郎は青葉鷹人。とりあえずフル（Full）。意味は馬鹿、愚か者、アホなど）とでも呼んでくれれば「オイッ」いい。訂正は一切無い「してくれよ………」」

「……にいがお世話に。フル」

「乗るの!?!」

「……乗る」

……んー。しかたない、解釈してやるか。

「つまり『なんて呼べばいいのかわからない。だからにいが言った呼び名で呼ぶことにする』ってことだ。な、スズ？」

「（こくっ）」

「おま……す、凄いな……」

「ハッ、この程度普通にわかるだろフル」

「フル、フル」

「何か馬鹿にされてる……。はぁ、なるほど……さすが究極のシス
「ン」

「どういたしまして」

と、笑顔で返してから次の説明に移ろうとすると、青葉がこんなことを言い出した。

「とりあえず、俺のことは青葉でいいぞ」

……アイコンタアークト……！

いいかいスズ。絶対に、絶対に呼んではいけないよ？

「……（こくっ）」

小さく、本当に小さくこちらを向いて頷いた。後で頭撫でてあげない。

「……嫌」

「ええ……？」

「クク、馬鹿め。スズは俺の妹だぞ？ 義理のだが」

「……わかったよ……もういいです、はい」

何か呆れたようにそう言い放ったので勝ち誇った気持ちでスズの頭を撫でていると、青葉は話の続きを促し始めた。まだ話あったの

か。

「で、そちらの義妹さんの名前は何なんだ？ まだ俺しか言ってないだろ」

……そういやそうだったな。

「……しかたないな。こちらの天使エンジェルは俺の義妹佐々木鈴音。見ての通り体が弱いんだから、無神経なことをしたり手を出した日には俺がその身を死よりも恐ろしいJ I G O K Uに突き落としてやるから覚悟しとけよ？」

「あ……ああ……わかった……（死神も殺せそうな剣幕だな……）」

……？ なんだこいつ、そんなにビビってからに。特に何もする気はせんというのに……たぶん。

「……バス、来た」

つと、そろそろ紹介も終わりか……。

バスの中では誰もが羨む窓際まひらを勿論スズに譲り、俺はその隣に腰掛ける。スズは騒がし過ぎるのが嫌いなので周りが会話をしているも俺は無言で居ることにした。話しかけてきたクソ青葉バカはとりあえずバスの床に埋めておいた。

そんなこんなで殆ど会話などせず、目的地である某県某市某ホー
ルに着く頃には、気付けば既に正午を過ぎていた。

スズを待たせてしまっていたので土下座する勢いで謝ったのだが、
何故か必死で俺を許し宥めてくれた。我が天使はなんとお優しいこ
とか。

……と、いうわけで現在俺達はホール内のそれぞれの部屋（青葉
は一人用に当選したらしい。方法は普通に手紙での応募みたいだ。
なので俺とスズは一緒の二人部屋、青葉は二人部屋）に荷物を置い
ていき、食堂の一つの長机の端の方へ三人で座った。片側の端に俺
隣にスズが座り、反対側の端に青葉のみが座る。

生憎と周りは随分と空いていた。初日は食堂で昼食を頼めないら
しいのでここにいるのは殆どが弁当組だ。他は外のファミレスにで
も行っているのだろう。

俺は自分の弁当とスズの弁当（両方俺が作った。スズの嫌いなも
のを一切入れずに栄養バランスもGOODな完璧仕様。スズは肉類
や油類が嫌いだから少し変則的な中身だ）を部屋から持ってきたバ
ッグから取り出し机の上に置く。青葉もコンビニで買ってきたであ
るう適当な弁当を手に持ち、机上へ置いた。

「そついえば「黙れっ！」ぐあ!？」

もうホント気を使うことを知らない青葉を殴り飛ばし、一息吐く。
何か爽快だわ、コレ。

「な……に、するんだよ……」

「スズは周りから注目されたりすることが苦手なんだ。人が沢山い
る時の会話はスズにとってはタブーに近いものなんだよ。バス内で
しゃべらなかつた理由その2も実はそれに当たる。……お前はホン
トに気を使うことを知らないな……」

「いや……実際に言ってもらわんとわからんだろ……」

「なにを言うか。スズの表情を読み取ればわかるだろうに」

「……無表情にしか見えないんだが」

「どこがだっ!! どう見ても『早くお弁当が食べたい』って顔してるじゃないかっ!!」

「っ……!!」

俺がそう青葉バカに言い放つと同時に、スズが驚きながらも頬を赤く染めて俺の服の裾を掴む。ヤバい可愛すぎるっ! 『もうやめて、恥ずかしい』ですねわかります!

「というわけで黙れ。もうしゃべるな。食事中にしゃべるのはマナー違反だ」

「あ……ああ、わかった」

義妹のこととなると本当にこいつ性格変わるんだなー……と、この時青葉バカは実感したのだった。

そうして昼が過ぎ、多少の時間を部屋で過ごして現在15時ジャスト。

その時間、このホール（他県にも同じようにテスト用のホールが幾つか用意されているらしい）の人々はまるで決められていたかのように入り口の近くに集まり、騒ぎ出す。というか決められていた。この時間に俺達 テスターは集められ、身体の変量解析を受けなければならぬのだ。

多変量解析というのは幾つもの計測の結果から答えを割り出す極めて正確な測定方法であり、聞いた話では今回の多変量解析は所謂レントゲンのようなものらしい。その身体データが個々人のキャラクターデータの”基”となり、仮想現実での自分の体となる。当初は現実の体をそのまま使用することに不満を唱える者はかなり多かつたらしいが、次第に鎮静化した。

鎮静化した主な理由を上げるとするなら、

1. 男性と女性の体では骨格からして仕組みが違ってきているので脳に負担が掛かり過ぎる。
2. たとえ同姓キャラにしたとしても、そのデータが現実の体と遠く離れていれば脳の認識にズレが起こる。多少ならば平気だが、本来の体よりも動きやすくなることは絶対に無い。

3. これが主に大半を締める理由だが VR機器『ヘッドプラント』は多変量解析の結果データを個人の認識元として登録するため、パスワードも無く必ず他者にデータをいじられなくなる仕様となっている。そのため解析データとの違い、つまりエラーが複数表示された場合は『ヘッドプラント』を起動することが出来ないのだ。要するに、取ったデータと本体が合ってなきゃ起動不可。

って、感じだな。……うん、これだけ言われりゃしかたないだろう。本人との体が違い過ぎれば『ダイブ（VRゲーム起動用語）』出来ないんだから。

さて……そういうわけで俺とスズと青葉は広場へやって来たわけだが……ふむ、まず一言。……うるせえぞてめえら!! スズも頭痛そうにしてんだろうが! 少しは静かにすることを覚えやがれっ!!

……よしわかった。とりあえずお前らVR世界で全員ぶつ殺す。Killしまくる。いいよね? いいよな? よし決定!!

……さて、と。フフフ。なあ読者達よ。俺がこんな耳を抑えてる

スズをそのままにして置くと思うか？ 思わないよな？ 何か準備してると思うよな？ その通りっ！！

俺はバッグから『こんなこともあるうかと』と準備しておいたヘッドホン型耳栓を取り出し、スズの頭に被せてあげる。色は青！
うん合う！ 可愛い！

「……あり、がと」

「どーいたしましたして」

さあて……なあ、運営共……これ以上スズを待たせるつもりなら俺は貴様等を殺しにい「お待たせしました」ちっ！！

「つと、やつとか」

青葉バカも遅いと思ってたよな？ よし合格！！ 青葉に『バカ』とルビ振るのはもうやめてやる。

「長らくお待たせしました。ただ今よりVRMMO『Endles
s Dystopia Online』オンラインのオープンテストにより
使用して頂くキャラクターデータのための多変量解析を行いたい
と思います」

はいはい。長つたらしい説明はいいからとつと終わらせましょ
うね。あ、スズのヘッドホン取ってねえ……まあいいか、後で俺が
説明すれば。

「ではまず一番先頭の方からこちらの小部屋に……」

……俺ら最後辺りだし、時間掛かりそうだな……。

0 - 2 : 現実と仮想へのプロローグ【?】(後書き)

【??? / ????

HN : ???? LV ????

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ????

Class : ????

Availability : ????

Skill : ????

Equipment : ????

Money : ????

【G】

0 - 3 : 現実と仮想へのプロローグ【?】

「では次の……」
「俺だな」

と、青葉が受付の方へ歩き出す。その背中からは「やっとか……」という言葉が出そうな雰囲気は漂ってはいるが、スズ至上主義な俺としては劳いの言葉すら掛ける気は起きない。第一、俺とスズも待っているのだから（途中でスズが倒れそうだったから無理矢理背負った。恥ずかしがってはいたが、スズは体が弱いのでこればかりは譲れなかった）文句しか出てこないのが現状だ。もう40分は経っているのだから。

そんな状況。俺達は受付側から生暖かいジトツとした視線を受け続けていた。

「……いに、もう、大丈夫。……降ろして」
「嫌だ」

所謂おんぶ等という行為によりスズを背にしながら聞こえてきた声にそう返すと、受付の人も苦笑したように視線を外していた。スズは視線を向けられれていたことに気付いてなかったみたいだけど。

「……」
「無理」

「……まだ、なにも言っていない」
「スズの考えてることはおみ通しだよ。『本当に大丈夫だから』、
だろ？」

その言葉にスズは息を飲み、ため息を吐きながら無言で肯定を示

す。いつもこんな感じなのでわざわざ驚いたりしてくれることは無かった。

「私にはいいの心、わからないのに……にいに、ズルい」

「フツ、愛のなせる技さっ！」

とかカッコつけて言ってみたり。事実だけど。

「……………」

……………黙ってしまった。どうしたんだろう……。

えっと、えーっと……と、とりあえずスズがなに考えてるか読み取らないと。スズに元気が無いのはダメ、ゼツタイ。

「……………」

「……………」

「……………ッ！」

……………なに……に……い！？ まさか……スズの心が……わ、わからない……だと……っ！？

「ク……クク……ハハハ……スズ、ごめんな……こんな駄目な兄で」

「え……？」

「いや……なんでもない、なんでもないよスズ……」

……………負けた……。俺の……俺のスズへの愛は、この程度だったという事なのか……。

スズを励まして上げたいのにその原因はわからない。いつでもスズのためになることを考えて動かないといけないのに……兄失格だ。

「いに……なにがあつたか、わからないけど……元気、出して」
「スズ……」

ああ……我が天使は^{エンジェル}何とお優しいことか、こんな駄目な兄にそんなことを言ってくれるなんて……俺は……俺は……く、スズ、一生付いていきますっ！！……ま、スズが結婚するまで、けどね……。相手がいるかないかは別として、結婚^{そと}がかなり心配だ。スズには幸せになってもらいたいのに……。

……え？ 俺？ ハハツ、さすがにそれはないだろ。俺とスズは義理とはいえ兄妹だぜ？ それに俺もスズのことを恋愛の相手として見てるわけでもないし、スズもそうだと思う。……もしそうじゃないとしたら……いや、それは考えなくてもいいか。

とにかく、俺はスズが大好きだ。スズも俺を無口ながらも好いてくれている。……つまりこれは……^{れっき}歴とした、兄妹愛だっ！！
クク……ああっ！ 兄妹愛っ！！ なんと素晴らしい言葉かつ！
なあんと素ん晴らしい言葉なのだろうかつ！！（大事なことなので二回言いました）

「よし、調子戻ってきた！ ありがとうスズ！ もうホントマジで愛してるっ！ いつでも俺を頼ってくれよっ！」
「っ！？」

スズがかなり顔を赤くして口をわなわなと動かし始めた。……が、その心を読むこともなく、俺は受付の方へ向き直る。
なぜなら、

「では次のお二人、こちらにお越しく下さい」

青葉の多変量解析が終わり、俺達の順番が回ってきたからだ。

「行くか、スズ」

「うん……うん……」

……まだ照れてるのかぁ……可愛いなあ。

とまあ、そんなこんなで多変量解析も終わり、扉を開けて部屋から二人で外に出る。

……え？ そんなこんなでなんだった？ えー、まあ、そんなに面白くも無かったからカットしたんだけど……簡略化するなら、まあレントゲンみたいなもの……ってコレさつきも言ったよな。言う必要無かったか。

今日は17時〜22時までの間がダイブ可能時間らしい。初日なので時間は短いのだろう。まあ、スズが不服そうだったらすぐに運営をボッコボコにしてくるけど。

そのまま部屋へと戻ろうと思っていたのだが、通路の壁に寄り掛かっていた青年Aを見つけて足を止める。言わずもがな、青葉である。

無視してやってもいいのだがフレンド登録もここで済ませておけば後々楽なので、本当にしかたなく足を止めてやった。

「終わったか」

「ああ、とつとフレンド登録しようぜ」

因みに俺とスズの登録は既に終わっている。二人用チケットはフ

レンド登録済みなのがデフォルトみたいだ。

「わかった」

と、俺と青葉はポケットからカードの形をしたメモリを取り出し、「オープン」と言い放つ。するとカードの表面が一瞬だけ鈍く光り、空中に半透明のホログラムで構成された画面が浮かんだ。その中に記された項目から『Endless Dystopia Online』と表示されているものを選び、ファイル内の『フレンド登録』のアプリケーションを起動する。

「……ん？ 鈴音さんは登録しないのか？」

「……別に、いい」

「スズは……まあ、あれだ……色々合つて無理だ」

……はあ。まさか、人間不信だから無理とは言えないよな……ただスズの許可貰ってないし。……いや、スズにとっては俺以外の奴らは皆信用出来ないだろうし。……これが本当に心配で結婚とかも大変そうなんだよな……まあ、スズの過去を考えるとしかたがないわけだが、な。

「……？ なんなんだ？」

「気にすんな。つーか察しろ。秘密を探る奴は嫌われるぞ」

「……そうか、そうだな。気にしないでおくよ」

うむ……なんだかんだ言ってもこいつは良い奴なんだ。デリカシイの欠片も持ってないような奴だけだな。

そんなこんなでフレンド登録を終了し、青葉と別れて部屋へと戻る。まだ時間は17時にはなっていないので、ダイブまでには時間が余っている。

と、いうわけで……キャラクターを設定しましょう！

種族や職種、HNハンドルネームに初期装備を設定しなければゲームを始めることは出来ない。ゲーム開始直後にも決められるらしいが、事前に設定しておいた方が早くゲームを始められる。

身体設定も根本的な部分まではいじることが出来ないが、髪や瞳肌の色ならば変えることが出来る。そのまんまの黒髪黒眼でも良いらしいがリアル割れが酷くなり過ぎるみたいだ。髪や目、肌の色を変えるだけの付け焼き刃のカモフラージュでも、実はそこまでバレ安くないらしい。

そういうわけで、現在俺とスズはカードオープンの項目から『キャラクター設定』のアプリケーションを選び、設定を開始したのであった。

因みに最初は外見設定から決めることとなっているため、スズと恋人のように隣合って壁に寄り掛かり、床に座りながら外見を決めていた。

「……なんだかなあ。自分のことだから、どれをどうすれば丁度良いとかよくわかんないんだよなあ」

呟きながら、ホログラムに浮かぶデフォルトそのままの自分を確認してみる。外出もよくするというのにスズと同じように全く色落ちしていない真っ黒の、普通な長さの髪。顔立ちも若干童顔気味なのだが、そこはスズ程ではない。

……義理なのに、スズとは結構顔立ち似てるんだよな。……あ、

そうか。俺、結構女顔だったのか。目立つ程でもないみたいだけど。

「いにいなら、なんでも似合う」

「そうか？」

「うん」

「……ありがと。でもスズだってそうじゃないか？ きっとスズだってどんな風にしても似合う。そう、絶対に！」

素でこんなに可愛いのがからなんでも似合うに決まっている。馬鹿にする奴とか居たらそいつはこの世から消す。

「お世辞でも、嬉しい」

「そんなんじゃないって。スズは本当に可愛いから」

「……あり、がと……でも、いにみたいには……」

「いや、違う。そんなんじゃない駄目なんだ。そこだけは譲れないんだ……。」

そう、そこだけは譲れないっ！ 絶対！ 必ず！ スズにはなんでも似合うんだっ！！

たとえスズが反論してきたとしてもこれは譲れない。

スズ可愛い。スズ最高。スズマジ天使。スズLove。俺がスズを否定するなんてこと有ってはいけないんだ……！

「……そう、かな」

「ああ！」

「……そう」

そう言った切り、スズは顔を逸らして俯いてしまう。耳が赤く、照れて恥ずかったみたいだ。

そんな光景を微笑ましく眺めながら、スズの頭を優しく撫でる。

スズも喜んでくれているみたいで、俺の方に体重をそのまま預けてくれた。

0 - 3 : 現実と仮想へのプロローグ【?】(後書き)

【??? / ????

HN : ???? LV ????

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : ????

Class : ????

Availability : ????

Skill : ????

Equipment : ????

Money : ????

【G】

0 - 4 : 現実と仮想へのプロローグ【?】（前書き）

途中でございほど、ある四文字が出現します。画面埋め尽くす勢いで出てきます。

……べ、別にそれで文字数ごまかしてるってわけじゃないんだからねっ！ 本当なんだからねっ！

0-4: 現実と仮想へのプロローグ【?】

そのまま無言の空間がしばらく続いた後、俺達は再び当初の目的である外見設定へと移行する。うん、ラブラブムードも大切だけど目的も達しないとね。

が……いざ設定を始めようという時スズがこちらを向いて口を開いたので、俺は耳を傾けた。

「にいに……」

「ん？ どした？」

「色、揃えよ？」

な……にい!?

……俺はもう死んでもいい。スズからこんな誘いをしてくれるとかもうあっひゃふふえ & amp; % @ # \$ な % @ は ! x い \$ # * !
! ! ! ! ! ! ! !

「勿論OKだ!」

「うん……まずは、髪」

髪ねえ……髪……髪……灰色とか？ 俺ら真っ黒な純色だから中途半端な色とか面白そうだし。

スズにそう提案し、了承を得て揃える。次に目の色へ移るが、どうやらそれはスズが決めていたようで翠色……つまり緑と決まった。肌の色はさすがに二人共いじらないようにした。そこまでいじろうとは思わないしな。だって、なんだよ肌のペアルックって。アホか。

「……これで、よし」

「そーだな、これ以上はいじめなさそうだし……後はHNとかそこ

らか」

言いながら、「決定」をクリック。次はHN入力画面へと移行する。

「いいには、なににする？」

「んー、そうだな……零都の零を取って、英語の ノイト N o u g h t にでもしようかな」

「じゃ、私は……鈴音の、鈴……読み方変えて、 リン R i n」

互いにそう入力して「決定」をクリック。次に種族選択画面へ移行する。

人間、ヒューマン エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、ケットシー 獣人種（猫とか犬とか色々）、竜人、魔族……何か色々あるわ。

「スズはコレ、どーすんの？」

「……もち、人間。ヒューマン 他は、外見に影響、及ぼすのが多いから」

……なるほど。素の外見でやりたいってわけか。

「それに……いいにと、せっかく揃えたのに……少しでも変えるの、勿体ない」

……な、なんて健気なんだ！

そんなに俺と揃えることに必死になってくれるなんて……他の種族にはステータスに補正があったりするのに、わざわざそのために人間を？

「……スズは、本当に優しいな」

「……えへへ」

す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押

「……いに」

「押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す」

「いに」

「押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押
す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押す消す押

「うわ……ちょ……今俺なにしてた……？」

「……画面を見てみれば、【@#%が!\$た&*れ&+ %せん】という文字……完璧バグってるな。使えるのかな……コレ。

「大丈夫……？」

「あ……ああ、平気だよスズ」

「……俺、ひたすら「決定」連打してたのか。なにバグるまで連打してんだよ。……でも、よくあるよね、エラーってわかっててももう一度同じことしたくなる時って。……え？ ない？」

「集中しすぎてスズの呼ぶ声にも反応しなかったようだ。なにくだらないことに夢中になってたんだ、俺。」

「……動くかな？」

画面をクリックして表示を消す。あ、ちゃんと消えた。
項目も確認してみる。

一番上から、u@&%V|I………ってこの時点でもう
駄目だろ。

とりあえずコレ選んで「決定」を押してみる。

【あな#%のアカ\$ン%@!vトでは:c@*#ん択x&
出/せん】

「……バグり過ぎだ」

バグってるし、元が【種族が選択されていません】でもない……
なんだコレ。【あなたのアカウントでは選択出来ません】……って
か？ 意味不。

もう一度クリックすると表示は消えたので、今度は全部を確認し
てみる。

「んー……何個あるんだよ」

殆どがバグっていて、選択しても意味が無いものばかりだった。
明らかに基の種族量より多く……スクロールバーめっちゃ小さい
し、コレ軽く百とか千とか越えてんじゃね、ってくらい沢山ある。
しかも全部バグ………っと、一つあった。

「これだけバグってないな。えーっと、なににな………【キマイラ】
？ なんだこれ。モンスターじゃねえ？」

まあいいや、とそれを選択して「決定」を押してみる。すると【
キマイラ でよろしいですか？ yes/no】という表示が出
てきたので、「yes」を押して種族設定を終えるようにする。

すると【種族 キマイラ を選択しました。種族は変更できません】という文字表示が出現したのでクリックをして消してから、なにやらスズが静かだったので隣を確認してみると……。

「むー……」

……なにやら再び外見をいじっていた。髪に二つ結びを作っているみたいだ。何か、耳みたいだな。

聞いてみると、どうやら俺を待っていてくれたらしい。……俺は勿論スズに土下座を「謝らないで！」しようとしたけれど、直前にスズに止められた。やっぱり優しいなあ、スズは。

「いに……土下座なんて、しなくていいから」

「でも、スズを待たせるなんて「いいから！」はい……」

無条件で許してくれるのか、スズ……。女神だ。

「とりあえず、次、職業」

「うむ」

スズが外見設定の二つ結びを終えて職業選択画面へ移行するのを確認して、俺も同じ画面へ移行する。もうバグってないみたいだよかった。

職業選択画面には四つの項目があり、戦士系統、魔導師系統、盗賊系統、生産系統と別れているみたいだった。……四つしかないのには理由がある。

『ED_下O』には職業派生というものが存在している。一つの系統から幾つもの職業へ派生し、またそこから派生するというシステムだ。

そして初めの系統というものが、戦士魔導師盗賊生産の四系統。

それを選んだ後ゲームを開始し、レベル五になった時点で本来の職業を選ぶことが出来る。その中には通常派生というものと特殊派生と呼ばれるものが存在し、通常派生は何もしなくても必ず派生項目に出現する。対して特殊派生はレベル上がっていくまでの自分自身の行動により何が追加されるのかが決まり、それらはまさに無数に存在している。

更に言うならば『EDO』の職業はダブルクラス制であり、二系統を選び使用することが出来るのだ。

……だが、俺は……、

「……あつれー……おっかしいな……何か、もう一つ勝手に決まってるんだが……」

【・ Mob系統

・ まだ選択されていません】

……Mob系統って、なんやねん。

「……諦める、俺。あんな馬鹿なことをしたのが悪かったんだ。自業自得だ」

言いながら 生産系統 を選択。理由？ Mob系統 って、絶対モンスターのことじゃん。つまり戦闘系。なら非戦闘選べば丁度良いってことだ。

「スズ、終わったか？」

「うん…… 盗賊系統 と、魔導師系統 。にいには？」

「ん？ あー…… 戦士系統 と 生産系統 だ」

バグで変なことになってる、なんてことは言わなくてもいいだろ

う。それでもし運営にプレイを止められたりすればスズと遊べないしな。スズにも心配とかさせたくないし。

「よしつと……これで終了」

「（こくっ）」

……んで次は初期装備だったかな。

あー……もうめんどいしなんでもいいだろ。……あ、これ良さそうだな。防具を一段階上げる代わりに武器無し、みたいだ。これでいいや。

……あ、色選ばないといけないの？ 灰×翠でいいよ、髪と目の色と同じだし。

【 灰×翠色の服 灰×翠色のパンツ 灰×翠色のブーツ で
よろしいですか？ yes / no】

勿論「yes」。

【初期装備を決定しました。ゲーム開始前ならば変更が可能です】

「……スズは、っ」と

隣にいるスズの画面を確認してみると、今まさに「yes」を押す瞬間だった。

【 銅の短剣 布の服 布のパンツ ブーツ でよろしいで
すか？ yes / no】

【初期装備を決定しました。ゲーム開始前ならば変更が可能です】

……ああ、そっちは布の服なのか。確かにそっちの方が一段階下

だな。

……これで終わりか。……なんか、疲れたなあ……はあ。

もう少し、もう少しだ。

現在、16時59分。

俺達は二人共頭にヘッドギア型VR機器『ヘッドプラント』を着し、ただその時を待つ。

ヘッドプラントには既にカードメモリを通してあり、コードは違う機械へと繋がっていたりコンセントだったりと色々だ。二人共ベツドへ横になっている。

その静かな空間で、ただ時計の秒針だけが音を刻む。今時そんなものを置いておくなど、物好きなものだと思う。

「……またVR世界あいつで会おうな、スズ」

「……うん」

……さあ、時間だ、行こう。

俺達は息を吸い、口々に望み完成した夢の世界へ行く魔法の言葉を言い放つ。

即ち、

「「ダイブ」」

【認証しました。ゲームを起動します。

INDEX
Endless Dysptopia Online
The Game Start
Loading . . .
Now Loading . . .

0-4：現実と仮想へのプロローグ【？】（後書き）

すんませんまだ現実編続きます。次は二話分スズ視点で、それが終わると本編第一章『不正甲虫のモンスタープレイヤー（仮題）』に入ります。

【Player / Monster

HN : Nought Lv1

SEX : 男性

AGE : 16

RACE : キマイラ

Class : Mob系統 / 生産系統

Ability : Mob言語和訳

Skill : なし

Equipment

胴 : 灰×翠色の服

足 : 灰×翠色のパンツ

靴 : 灰×翠色のブーツ

Money : 1000G【

0 - 5 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】（前書き）

0 - 5 / 0 - 6 はスズ視点です。因みに0 - 5 / 0 - 6 は読まなくてもストーリーに殆ど支障はありません。他キャラ視点之苦手な方が読まなくても大丈夫なようにできてます。だって自分、小説読んでる時の他キャラ視点の話は嫌いですし。

ストーリーには殆ど関係ありませんが、読めばスズの過去などが色々わかります。因みに時系列は0 - 1 からです。

0 - 5 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】

私は……私の名前は、”佐々木鈴音”。

私はこの名前を気に入っている。大好きな人……にいじ義兄が付けてくれた名前だから。

……私は人を、信じる事が出来ない。拒絶することしか私には出来ない。

にいにしか、信じる事が出来ない。にいにだけが、私に手を差し延べてくれたのだから。

これは、ただの依存だ。

わかっている。理解している。それでも私は、にいにしか信じる事が出来ず、他人が信じられない。

私は……にいが好きだ。大好きだ。にいにもずっと、私を好きでいてくれる。

でも、にいの”好意”は、私の”好意”とは違う。

にいには、私を本当の妹でもないのに凄く優しくしてくれる。

……だから、わかってしまう。にいの”好意”は私とは違う、家族である私に対して向けられているものなんだって。

私の、異性に向けるはずの”好意”とは違う、妹としての”好意”。

……それだけで、私は落ち込んでしまう。

……私は……本当に弱い。

ある日。ある朝。それは暑い夏の日で、ずっと楽しみにしていた日でもあった。

……今日は待ちに待ったVRMMO『Endless Dystopia Online』のオープン テストの日だ。

不自然無くいにと一緒に出掛けたくて、私がMMOで当選させたモノ。

いには心配ばかり掛けさせている。だから私は、このイベントを境に少しずつ頑張ろうと思っていた。

そうしなければ、いにはいつまでも私と一緒に居てしまう。それでは、駄目だ。せめていにはだけは、幸せになって欲しい。私は、近くに居るだけでいを不幸にしてしまう。私はいに好きだけど、本当に本当に大好きだけど……それはもう、諦めなければならぬ。

いのために。二人の、お互いのために……。

「……なあ、スズ。その格好で行くつもりなのか？」

と、私は意思はその一声で現実へと引き戻された。

言われて、考える。

……確かに、結構キツイ。見た目的にも結構恥ずかしいくらいにはなっていた。

でも、

「……これしかない」

私は全然外出することなんて無かったので、今着ている昔にいに買った藍色の服しか持っていない。どうしようもないのだ。

「……しかたないな」

にいにはそう眩くと家の奥へ入っていき、しばらく経って戻ってきた。そしてその手には、黒い上着。

「とりあえずこれ着とけ。気休めくらいにはなるだろ」

と言って、手に持つそれを渡してきた。

……大きい。これなら私の体の殆どが埋まってしまうことだろう。返事をして、着てみる。予想に違わず体の殆どを隠せたが……やっぱり少し不自然だった。でもそれはどうすることも出来ないだろう。

「んじゃ、行くか」

「（こくっ）」

頷いて、私達は玄関を出た。

外に出るのは本当に久しぶりで、日差しもキツかった。

……まあ、にいにが私のために色々と準備をしておいてくれたみたいなので、殆ど問題と言える程のものは無かったけれど。

そうして着いたバス停には、一人の青年が既に居て、立っていた。とりあえず青年Aとでも名付けようと思う。

私はなるべくその人に近寄らないようにして、にいにと一緒にベンチに座った。案の定青年Aは私の近くに寄ってきていたけれど……にいにが撃退してくれた。

とりあえずあちらで繰り広げられる会話を流し、私は考える。

また、恐ろしく感じてしまった。

いつも、そうだ。

にいに以外の人間が近くにいと、怖くて震えてしまう。

……にいを心配させないために、これも頑張っつて治さないと……。

と、しばらくそうして自分を責めていると、二人が私の隣に座ったことを確認した（私の隣は勿論にいに）。それに私は話を聞こうと、耳を傾ける。

「んで、それ……その子がお前がお前の溺愛してらって言う義妹さんか？」

口調から察するに、二人は知り合いだったみたいだ。……なのに撃退してくれる時にあんな凄く蹴り飛ばしてたんだ、にいに……。

「そうそう。お前ら野郎共が幾ら集まったところで届きはしない程の可愛さを誇るマイ天使だ^{エンジェル}」

に……にいに……！！

「……そんなことない」

顔が赤くなることを自覚しながらも、そう声を絞り出した。

その後、適当な会話をしているとバスが到着した。

あの青年Aは青葉鷹人と言っらしいが……めんどくさいのでフルでいいだろう。いにもそれでいいと言ってくれている。

……バスの中には沢山の人間が居て本当に怖かったけれど、いにおかげで特に何事もなく目的地であるホールに行き着くことが出来た。

ホールに着いた私達は、フルと別れてペアの二人部屋へと向かう。

……相部屋だとは聞いていなかったけど……まあいつも一緒に住んでいるいになるので、あまり気にはならない。いには”絶対”に私に欲情なんてしないんだし。………してくれてもいいんだけどな……。

部屋に行った後は弁当を持って食堂へ向かう。私の好みを完璧に把握しているいのが作ったお弁当なのでかなり期待してもいいだろう。……いに、もの凄く料理上手だし（私はかなり苦手。自分でもヤバいと理解出来る。しかもダークマターが出来る。なぜだろう……いには喜んで食べてくれてたけど）。

食堂に着くと、フルが長机の一つに座っていた。いには私に気をかけてくれたが、あの人の近くの方がいにが喜ぶだろうと考えて歩き出す。

……喜ぶのかな？ どうしてか、そんな姿が全く予想出来ない。

長机に三人で座り（勿論私はいにの隣）お弁当を机の置くと、フルが口を開いた。

「そっいえば「黙れっ！」「ぐあ！？」」

急にしゃべり出したフルをいにが殴り飛ばして、一息を吐く。

「な……に、するんだよ……」

「スズは周りから注目されることが苦手なんだ。人が沢山いる時の会話はスズにとってはタブーに近いものなんだよ。バス内でしゃべらなかつた理由その2も実はそれに当たる。……お前はホントに気を使うことを知らないな……」

……やっぱりにいには私のことをよくわかっている。

目立ちたくない。人に話を聞かれて、陰口を叩かれることが嫌……

……沢山の人間が、怖い……。

……本当に私は、ダメな義妹だ。

義兄と、違って……。

ドロ沼に嵌りそうだったので、とりあえず考えを元に戻して弁当を見つめる。

「いや……実際に言ってもらわんとわからんだろ……」

「なにを言うか。スズの表情を読み取ればわかるだろうに」

……にににしかわからないと思う。

「……無表情にしか見えないんだが」

ほら……。

はぁ……早くお弁当食べたいなあ……。そろそろお話、終わらないかな……。――

「どこがだっ!! どう見ても『早くお弁当が食べたい』って顔してるじゃないかっ!!」

「っ……!!」

驚いて、かなり恥ずかしかったので……ににの服の裾を摘んだ。もうやめて、恥ずかしいから……ににに。

……と、そんなことを思って黙っていると、にいにはフルを睨みつけて、言う。

「というわけで黙れ。もうしゃべるな。食事中にしゃべるのはマナー違反だ」

「あ……ああ、わかった」

……にいに、本当に私の考えてることわかるんだよね……。そんなことを思いながらも口に出さず、三人で黙々とお弁当を食べることとなった。

いただきます。そして、ごちそうさま……。

そうしてお昼ご飯が済んで、一時フルと別れてにいと一緒に部屋で穏やかな時を過ごした。

現在の時間は15時過ぎ。私達は多変量解析を受けるためにホール入り口付近の受付に並んでいて、特に何もせずと立ち尽くしていた。

……辛い。

もう並び初めてから軽く30分は経っている。

……そして私は、昨日までずっと引きこもっていた、かなり運動不足の体。

たった30分だけでもこんな体では、もの凄く辛く、キツイのだ。疲れてきて、足元がおぼつく。次第に視界も不明瞭に、体の重心も定まらずフラフラしてきて……倒れ ようとしたところで私は、

誰かに体を支えられた。

にいだ。

にいには私をしつかり支えながら、言う。

「大丈夫か……スズ？」

「……あり、がと。でも、もうだいじょう、あ……」

立ち上がるうとして、力が入らなかった。

再び倒れそうになった私はやっぱりにいに支えられて、にいは本当に心配そうな顔で続く言葉を放つ。

「そんなわけないだろ。ほら、おぶってやるから……」

そう言うのにには私に背中を向けてしゃがむ。

……おんぶ、なのかな？ ……それは恥ずかしいよ、にいに……。

「……」

「ほら、早く。そんな恥ずかしかつても駄目だ。どっちにしろ、もう限界だろ？」

「……む、むー……確かに……そう、なんだけ……ど……」

「拒否権は無いから。……強引なのはわかってるけど、こうでもしないとスズは無理してでも立ってるだろ？」

……確かに、その通りだ。

「いつでも頼っていいんだよ。俺はスズの、にいになんだからさ」

……そう、なんだよね。

私の……”義兄”だから……。

……だから私は、あまり頼りたくないんだ。

にいいから、私は離れるべきなんだから……。

「……ったく」

そうして戸惑っている私を……にいいには無理矢理おぶった。

……恥ずかしくて、申し訳なくて、口を開いて「降ろして」と言おうとした。

でも……それより早く、にいいには言う。

「俺は……スズが倒れたら、心配なんだよ」

「あ……」

「……ただ、それだけだから……」

……やっぱり。

やっぱり……私は、にいいが好きなんだろう。

本当に愛おしいくて、大好きで、胸が引き裂かれるくらい離れるのが嫌で……。

そう、再認識させられる。

私を”私”として扱ってくれる。

道具ではなく……ただ、大切な一人の人間として。

……何の意味もないのに。何の役にも立たないのに。

何の利益も、生まないのに。

……”あの頃”から、ここだけはなにも変わっていない。

だから……だから私は、にいいが好き、なのかな……。

だから、こんなにも嬉しくて、大好きで……泣きたいくらいに悲しいのかな……。

「やっぱり、お前はお前だな。本当にまっすぐだ。さすがは俺の認めただ奴だけはあるよ」

「うっせえよ青葉。……俺はそんなに強くない。お前みたいに、—

人なんかじゃ生きることにはできないからな……」

「……俺も無理だよ。お前と出会うまでは、何も感じなかったし……何も楽しくなんてなかった。だから、俺はお前に感謝をしてるんだ」

「……ったく、そうかい。あーもうこの話やめやめ。暗い話なんて俺の領分じゃねー」

……二人はそんなことを話していた。

その時のフルルの顔はとても楽しそう……やっぱりいいには凄いな、と思った。

0 - 5 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】（後書き）

ふ、実は現実のノートに書いてある文字を写してるだけなんだZ E
っ！

……その分書くのがつまらないです。ノートには0 - 1 ~ 0 - 6ま
でが書いてある内容なので早く1 - 1を書きたい……。。

0 - 6 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】（前書き）

実はこれでもうストック終わりだったりする。

因みに今回途中で不自然なほど急に突然シリアス入ります。

0 - 6 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】

あれから更に時間が経って、フルは受付に呼ばれていなくなっ
った。

……そろそろ降ろして欲しいのに、何度言ってもいいには降ろし
てくれない。

「……いいに、もう、大丈夫。……降ろして」
「嫌だ」

本当に大丈夫なのに……。

「無理」

「……まだ、なにも言っていない」
「スズの考えてることはおみ通しだよ。『本当に大丈夫だから』、
だろ?」

……そんな言葉に私はため息を吐いて、無言で肯定を示す。
……なんだか、ずるい。

「私はいにの心、わからないのに……いいに、ズルい」
「フツ、愛のなせる技さっ!」
「……」

……私だって、いいにのことが大好きなのに……。
そんなことをつらつらと考え込んでいると……いいにが急に落ち
込んで、静かに笑いだした。

「ク……クク……ハハハ……スズ、ごめんな……こんな駄目な兄で」

「え……？」

「いや……なんでもない、なんでもないよスズ……」

……大丈夫かな？ 本当にどうしたんだろう、にいに。とにかく……にいを励ましてあげないと……。

「にいに……なにがあったか、わからないけど……元気、出して」「スズ……」

……こんな時、上手く言葉に出来ない自分が恨めしい……。

……どうかな？ 元気、出してくれたかな……？

そう思い、にいにの顔を覗きこんだ瞬間、

「よおし、調子戻ってきた！ありがとうスズ！ もうホントマジで愛してるっ！ いつでま俺を頼ってくれよっ！」
「っ！？」

隙を突かれて、顔がかなり熱くなったことを感じた。たぶん、真っ赤になっていることだろう。

恥ずかしくてなにか言い訳を探そうと思いを巡らし、口を開いたが……言葉が出てこない。

そうしていると受付の方から私達を呼ぶ声が聞こえてきて、結局なにも出来ないまま全てが終わってしまう。

「行くか、スズ」

「う……うん……」

顔の熱も冷めぬまま、にいには私を背負って多変量解析を行う部屋に繋がる扉へと向かって歩いていった。

……変な誤解されてないといいけど……。

多変量解析を終え、部屋に戻る途中に居たフルとの会話も程々にし、私達は部屋へと戻った。

まだ テスト開始までには時間があるからいにと一緒にキヤラクター設定をすることにして、壁に寄りかかりながら、床に座りにいと寄り添う。

まるで恋人みたいな位置と格好だけど……これくらいは、いいよね？

「……なんだかなあ。自分のことだから、どこをどうすれば丁度良いかよくわかんないんだよなあ」

いいに自分のホログラムの画面を見つめながらそう呟く。

……恋は盲目って言うのかな。いいにならなんでも似合いそうな気がする……。

「いいになら、なんでも似合う」

「そうか？」

「うん」

「……ありがと。でもスズだってそうじゃないか？ きっとスズだってどんな風にしても似合う。そう、絶対に！」

お世辞……なのかな。でも、それでもそう言ってもらえるのは嬉しい。

「お世辞でも、嬉しい」

「そんなんじゃないって。スズは本当に可愛いから」

「……あり、がと……でも、にいにみたいには……」

「いや、違う。そんなんじゃない駄目なんだ。そこだけは譲れないんだ……。」

そう、そこだけは譲れないっ！ 絶対！ 必ず！ スズにはなんでも似合うんだっ！！」

……何だか顔が赤くなっていくのが自分でもわかってしまう。

にいに……鈍感すぎなんだよ……そんなこと言われると、凄く……。

「……そう、かな」

「ああ！」

「……そう」

少し恥ずかしくて、俯いて目を逸らしながらもそう言い返す。

……でも、やっぱりにいにはなんでもおみ通しなわけ……はあ。

そうして赤くなった頬を冷ますことも兼ねて、しばらくにいに寄り掛かりながら頭を撫でてもらう時間を過ごしてから、私達はキャラクター設定へと戻っていった。

キャラクター設定も終わり、現在の時間は16時59分前後。
もうすぐVRMMOの初日。テストが始まるのだから自然とホー
ル内が静かになり、事実を知らない人がこれを見、聞いたのなら、
不気味とでも表現するのだろう。

「……またVR世界あっちで会おうな、スズ」
「……うん」

そうして時間が変動し、17時へなると同時に私達は一望み完成
した夢の世界（VRMMO）へ行くための魔法の言葉を言い放つ。
即ち、

「「ダイブ」」

【認証しました。ゲームを起動します。

Now Loading……Loadend.

……The Game Starting.

Endless Dystopia Online in L

OG・IN】

『あなたの夢は、なんですか？』

混濁した意識の流れの中。心と呼ばれ、表層心理と称され
る場所。

自らが意識下に置かれ、支配されている場所。

……夢？

……いつたい、なんのことだろうか。

私はダイブと唱えて、そのまま意識をVRMMOへと移行させて

……それから……。

……それから？

『あなたの夢は、なんですか？』

……これも、この質問も……ゲームに関係があるのかな。

……答えるしか、ないかな。

でも……私の夢って、いつたいなんなんだろう。

にいにから離れること？ ……これは夢じゃない。

にいにから嫌われること？ ……なんでそうなる。

にいにから可愛がられること？ ……いつもされてる。

にいにと結婚すること？ ……いや、嫌ではないけど……話が飛躍し

ず。

……さっきからにいにのことしか、考えてないなあ。

『表層心理からは解析不能。これより深層心理へとアクセスします』

……それはいつ頃のことだっただろう。もう記憶が曖昧になって

しまっていて……よくわからない。

九年前？ 十年前？ そのくらい、昔だった気がする。

……私は孤児だった。

でも楽しかった。孤児院……もうこの呼び方は古いかな。なら、そう、児童養護施設。そこにいた人達は皆優しく……その中でも一番仲が良かったのが零都……にににだった。

その頃からににのことは好きだったと思う。でも……ただ、それだけ。

ににには誰かの養子になることに決まって……だから別れは辛かった。

でも約束した。もう一度、必ず会おうって……。

……ににがいなくなつて、何月か……何年か……今はもう覚えていないけれど、長い長い時間をずっと過ごしていた。

そしてある日……私の家族が判明した。

でも……既に死んでいた。

そうして私に、本当に多くのお金が入ってきた。でも私には関係ない……はずだった。

施設にいた私には関係がない……はず、だった。

……ある日からか、職員が私に暴力を震うようになった。

……ある日からか、同じ施設の人達から虐められるようになった。

……ある日からか、いろんな人達が私に媚びを売るようになった。

……ある日からか、私の親友だったはずの人達は、とっくに全員私を裏切っていた。

その人達は、皆口を揃えて言う。同じ、まったく同じ言葉を。

金、金、金……って。

……もう嫌だ、嫌だった。誰も信じられない。信じたくない。

でも、死にたくない……死ぬのは、怖い。

一人は辛い。でも、死にたくない。一人は寂しい。でも、誰も信じられない。

……何日も、何週間も、何カ月も……。

……だから。もう嫌だった。

でも……ある日。

零都が……にいが、約束通り会いに来てくれた。

忘れていなかった。約束を。

……でも。

私はいにも信用出来なくて……だから、試した。

……結果は、にいの勝ち。

私はかなりの大金を持っていることをにいに話した。でもにには『どーでもいい』と言った。

少し驚いて、どうすればいいと思うか聞いてみた。

いつもなら……皆、私に媚びを入れてくる。でも、にいには違った。にいには、『使い方がわからないなら、自分達より不幸な人達のために使おう』って……そう言った。

……さらに試すために、次は”全額を募金した”と嘘を吐いてみた。

いつもなら……皆は、私を責めて暴力を震う。

けど……にいには、また違った。にいには私の頭を撫でながら、『偉いな、スズは』って……。

……だから、泣いた。だから、謝った。

にいには私の話を黙って聞いてくれて……外側の人間として、施設の人達に然るべき処置をしてくれた。

そうしてその後は、私はいにのところの養子になった。

……だから。

だから私は、にいが大好きなんだ。

にいが幸せなら、私はそれでいい。

にいが幸せになれるのなら、私は手を引く。

それが私の、恩返し。たったそれだけの、願い。

”……でも……本当の私の想いは……”

『深層心理の解析を完了しました。これよりゲームへとログインします』

0 - 6 : 現実と仮想へのプロローグ2【?】 (後書き)

なるべく早く更新していきます。

P・S・次からは普通に主人公視点です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1332ba/>

Endless Dystopia Online

2012年1月4日01時45分発行